

公益社団法人日本超音波医学会第 91 回学術集会を終えて

会長 中谷 敏

(大阪大学大学院医学系研究科機能診断科学)

1. はじめに

2018 年 6 月 8 日（金）から 10 日（日）の三日間にわたって神戸国際会議場・神戸ポートピアホテルにて公益社団法人日本超音波医学会第 91 回学術集会を開催させていただきました。日本超音波医学会は私が循環器内科を志した直後に入会させていただいた学会であり、私の医師としてのキャリアの原点とも言える存在です。当時の学術集会は年二回だったと記憶していますが、その都度何か新しい研究を発表し、会場では厳しい質問に答えるということを繰り返して段々成長させていただいたように思います。そのような思い出深い、また私を育てていただいた学術集会を今回担当させていただいたことを大変光栄に感じておりますと同時に、私にこのような機会を与えていただきました日本超音波医学会の皆さまをはじめ、関係各位に深く感謝申し上げます（図 1）。

2. テーマ

今回の学術集会のテーマは「超音波医学の知と技を究める」としました。知は知恵であり、science であり、医学（medicine, M）や工学（engineering, E）の進歩そのものです。一方、技は、手技であり、art です。超音波医学を日常臨床に役立てるためには、最新の science に通じていることと、それを実践するための art を向上させることが必要との考えから

このテーマを選択しました。Science and Art には、科学と芸術、理系と文系という意味合いもあります。人を対象とする医療・医学には広い視野と洞察力が欠かせません。学術集会ではこの Science and Art をキーワードに、超音波医学に関する幅広くかつ深い情報交換ができるように心がけました。

学術集会ロゴは知と技を表現した頭と手を組み合わせたものにしました（図 2）。学術集会のロゴとしては少し奇妙なデザインではありましたが、それなりのインパクトはあったのではないかと思います。

3. 特別プログラム

超音波検査は今やきわめて一般的な検査法で、探触子さえ握れば誰でも画像らしきものを出すことはできます。しかし、それを使いこなす結果を正しく解釈するためにはその背後にある技術的な側面や限界点、また疾患の病態生理や治療法、予後を知らなければなりません。そのためには M と E の双方の研究者が垣根なく話し合える場を提供する必要があります。このことはまた日本超音波医学会の最大の特徴でもあります。今回は「知を究める」シリーズの特別プログラムとしては、最先端知識を学べる教育講演の要素の強いシンポジウムと、いまだコントロールバーチャルなトピックに対し総合討論を重視したパネルディスカッションを、領域横断、基礎、循環



図 1 開会挨拶



図 2 展示ブース前の学術集会パネル



図3 デジタルポスターセッション
多くの人に参加いただけました



図4 デジタルポスター閲覧コーナー
デジタルポスターは自由に閲覧可能としました

器、消化器、産婦人科、小児、乳腺、甲状腺、泌尿器、血管、運動器の11領域にわたって設けました。一方、検査自体についても芸術的とも言える高度な技術を駆使する検査者がいる一方で、レベルの低い検査者や施設があることも事実です。さらに昨今では若手医師の技術力の向上も問題となっています。これらの問題点を解決して高い技術力（art）をあまねく担保するために、「技を究める」シリーズの特別プログラムとしては、心臓、腹部、産科、血管、救急、運動器の6領域において日頃検査に携わっている先生に超音波検査の際のコツやピットフォールを紹介いただくセッションを設けました。また技を磨くためには実際に指導を受けることも重要です。そこで今回は呼吸器、運動器、救急、消化器の領域でハンズオンも実施しました。

4. 一般演題

一般演題は例年通り口述発表とポスター発表とか



図5 会長講演

ら構成しましたが、ポスターセッションはすべてデジタルポスターとし、発表者は手許のタブレットで操作しながら発表いただく方式を採用しました（図3, 4）。これは他学会も含めて従来のポスターセッションではポスター近辺にいないとディスカッション参加もままならず、さらにひどい場合にはポスターを貼りっぱなしで決められた時間だけそこにいればいいというようなものもあって、せっかくの研究成果が十分に披露できないと感ずることがあったからです。今回はなかば独立したポスターブースを4つ設営し、演者は手許のタブレットで自分の強調したい部分を自由に拡大、下線引きなどしながら発表ができました。おかげさまでこのポスターは大変に好評で、参加者からは「やる気の出るポスターセッション」という声も聞かれました。

5. 会長講演

「画像診断の未来」というタイトルで会長講演をさせていただきました（図5）。昨今、種々画像診断法（マルチモダリティ・イメージング）の進歩とともにいろいろな疾患の診断が容易かつ正確に行えるようになってきました。循環器領域を例にとると、CTによる冠動脈評価やMRIによる心筋性状評価は画期的な進歩であり、まさに臨床のワークフローを変えたと感じています。心エコー検査は簡便に多くの情報を取得できるツールとしてきわめて有用ではありますが、これだけで心疾患の診断や予後予測が行えるわけではありません。講演では、今後、われわれは心エコー検査だけでなく、他のモダリティにも通じている必要があること、基幹病院では、各モダリティの専門家を集めた心血管イメージングセンターを持つべきであること、イメージングセンター

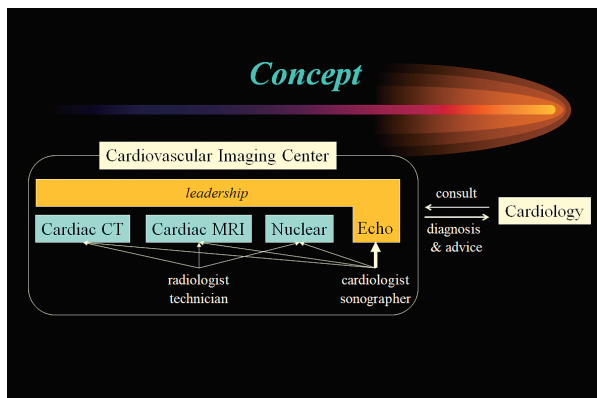


図6 心血管イメージングセンターのコンセプト
心エコー、CT、MRI、核医学を心エコー医のリーダーシップの下に束ね診断の効率化を図ります



図8 賑わう展示会場



図7 クイズラリーの問題
展示会場のあちこちに問題を掲示し、参加者にはクイズに解答いただきながらブースを回っていただけるようにしました

長は解剖と機能に通じ、かつ臨床知識の豊富な心エコー医が務めるべきこと、などをお話させていただきました（図6）。もちろん循環器領域だけでなく他領域も事情は同様かと思います。超音波医学の学会である日本超音波医学会でこのような講演するのが適当かどうか、少し迷いましたが、マルチモダリティ・イメージングのトレンドは今後ますます盛んになることが予測され、あえて提示させていただきました。

6. その他の工夫

今回の会場は、神戸国際会議場と神戸ポートピアホテルの二か所に分かれており隣接しているとはいいながら、移動には時間がかかります。そのため会議場から最も離れた企業展示ブースやポスター会場にいかに足を運んでいただくかについて考えました。



図9 ファイアースイドトークにて

そのために企業の方からもアイデアをいただき、実施したのがクイズラリーです（図7）。これは展示会場のあちこちに超音波関連の問題を掲示しておき、それをブース間を回りながら解答するというものです。最終日には解答を提示するとともに成績優秀者には記念品を差し上げました。また企業のハンズオンも展示会場で行っていただきました。これらの工夫がどの程度効果を上げたかはわかりませんが、展示会場も常に賑わっていたように見受けられました（図8）。

なお工夫というわけではありませんが、二日目夜の恒例のファイアースイドトークでは会長の趣味でジャズのビッグバンド（New Wave Academy Jazz Orchestra, 大阪大学軽音楽部OBのバンドですが、プロの方もはいっておられます）に来ていただきました（図9）。私自身が演奏をしっかりと楽しみたいという身勝手な理由で最初の30分は飲食なしの演奏のみにさせていただきました。空腹で来られた方には申し訳ありませんでしたが、ジャズらしいジャズを堪能いただけたなら幸いです。



図 10 スタッフとの記念写真

7. 最後に

最近の日本超音波医学会は、Ultrasonic Week として関連諸学会との共同開催を行うことが常ですが、今回は第 37 回日本脳神経超音波学会と会場の一部を融通しあったものの、基本的には日本超音波医学会の単独開催の形をとりました。これは私どものような小さな教室が主催する際にはあまり多くの学会と共同開催すると端々まで目が届きにくく、結果として学会を通じて表したい自分の意図が曖昧になるのではないかと危惧したからです。会場数も 14 とそれほど増やさず、海外からのゲストも呼ばず、他学会とのジョイントセッションも 3 つにしぼるなど、

どちらかと言えば地味な作りの学術集会だったかも知れませんが、その代わり内容については自分の意図が実現できるような濃いものに仕上がったのではないかと思います。その甲斐あってか、前週に日本超音波検査学会が大阪で開催されたという不利な条件であったにもかかわらず、単独開催としてはおそらく過去最高レベルの約 4,400 名の参加者にご参加いただくことができました。参加者の方からも、いい評価をお聞きすることが多く、嬉しく思っています。

最後に、今回の学術集会を成功に導いてくれた実行委員の皆さま、教室スタッフ、事務スタッフの皆さまに感謝を申し上げます（図 10）。